

→開高健とナウマン象がいた町——我孫子(あびこ)周辺

2017.7.9(日)カルチャーウォーキング

関西文学散歩第 524 回 参加報告

今回は住吉区民センターで、「開高健、関西悠々会理事」吉村直樹先生のレクチャーもあった。開高健が後々、妻となる牧羊子と同人誌の集まりで知り合い、からめとられていく様子を大阪弁でおもしろく話していただき、いつの世も女は才能のある男を見逃さず、必ず掌中に納め、そして男はあらがいようもなくそうになってしまう悲しい生きものなんだと思った次第である。

それにしても開高健は、この著作の谷沢栄一や向井敏とのつきあいや同人誌の集まりのくんだりで、「発達したのは耳と舌だけで心はいつも隙間風におびえていた」と吐露しており、常に心のうちで葛藤し苦しんでいた様子がかがえる。



さて、今日の文学散歩のタイトルに「…ナウマン象がいた町…」とあったが、我孫子南中学校エントランスホールに設けられている「アビナンミュージアム」にも立ち寄った。今から7万年前～10万年前に、この辺りをナウマン象やオオツノジカが闊歩していたことを知る足跡化石の複製や地層のはざとりなどが展示されていた。広いホールの一角をはがすと、足下のガラス張りのケースの中に、その夥しい数の足跡化石が見てとれ、後年に「オーパ！」を著わした、あの巨体の開高健がこれを知っていたら…、と少し興奮する。

そして今日のカルチャーウォークの最後は、大阪市立大学同窓会の方々のご好意で、構内図書館の開高健コーナーや、北に「あべのハルカス」などの高層ビル群、南に足下の大和川や南河内を見渡せる展望室を見学させていただいた。さらに圧巻は、彼が大阪市立大学を同級生より遅れること数ヶ月、12月によりやく追試を受けたまさにその講堂で、『破れた繭』中のくんだり、そのおもしろいエピソードの個所を、大学放送部の現役女子学生が朗読して下さったことだった。



大阪市立大学といえば、一昨年に話題になったのが本校創設に所縁ある五代友厚。その話題後に建てられた銅像や、市大名物というメタセコイアの並木にもご案内いただき、本校同窓会と関西悠々会の格別のご好意に感謝あるのみでした。そして今回、大阪が生んだ開高健という作家の自伝的小説を知り、その文学性の高さで美しさで悲しさを思い、この機会を得たことは幸いでした。大阪文学振興会の会員になって2年目ですが、この会に誘って下さったマラソン愛好家の知人にも改めて感謝しなければならないと思っています。

(記・田原由美子)

